



火について

霜 山 徳 爾

「地水火風」の四元などというと、恐ろしく古風な感じを与えるかもしれない。たしかに東洋においても、西歐においても、中世的な表現である。しかしこの四元こそ、子どもの心が育っていくために欠くことのできないものであることを痛感する。

「地」については多言は要しまい。高層住宅の高いところに住む子どもの、大地へのあこがれは想像以上である。小さな子どもでも一日に少なくとも一度は下に降りて、土いじり、泥遊びなどさせないと、彼等がいら立つことは日常的にいくらでも観察できる。

「水」についても同様である。水のアモルフな性質は、子どもの興味をいくらでもかきたてる。水遊び、海辺のたわむれにおいて子どもは疲れを知らないかのようなのである。

「風」というのは大気であり、空気であるから、これも子どもに必要なのはいうまでもない。澄んだ、新鮮な空気、涼しい緑風を知らないのは、大都会の子どもの不幸である。

それでは「火」はどうだろうか。子どもにとっては火は危険なものであり、火あそびは禁じられている。しかしそれにもかかわらず、「火」は同様に大切なのである。それを教えてくれるのは、例えばガストン・バシュールの「火の精神分析」である。

ガストン・バシュールは、一八八四年に北東フランスに農民の子として生まれた。初等教育を終えてからは、貧しいために労働者として働きながら、もっぱら独学でバカロレア（大学入学資格）取得の試験に合格す

る。これは、よほど高い知能と努力なしには、不可能なことである。さらに彼は宿願のリサンス(学士号)を取得し、遂にはよほどの英才でなければとれないアグレガシオン(教授資格)も手に入れ、やがてソルボンヌ大学に教職をとることになる。彼の著作はそのふしぎな魅力のために、ほとんど邦訳がある。直接の教育書はひとつもないが、しかし子どもの教育にたずさわる人には、限らない示唆を与える。それはイマージュということを教えてくれるからである。

「火の精神分析」の内で彼は、「いろりに燃える火は、疑いもなく人間にとつて最初の安息の象徴、安らぎへの誘わないの主題である。燃え上がるたぎぎを前にしての夢想がなければ、人は安息の哲学を考えることはできない」と述べ、子どものころを次のように回想している。「自在鍵には黒い、大鍋がさがつていた。ご、ご、ごの上の小鍋は熱い灰の上にあつた。おばあさんは頬をふくらませて眠りこんだ。焔をもう一度かき立てようとしている。すべてのもが一度に焼けていた。家族のための上等の馬鈴薯。私のためには灰の下の新鮮な卵、「火」の時は時計で測られない。一滴の水が殻の上ですぐ蒸発して卵の焼けたことをそれと知らせた。ゴーフルを焼く鋳型が持ち出された。それはたぎぎの焔をグラジオラスの花弁のように引き裂いた。そしてすでに焼き上がったゴーフルが私のエプロンの中にあつて、それは唇よりも熱かつた。そうだ、この時、私は火を食べたのだ……」

このような体験が彼の壮大な思想の基盤、豊かなファンタジーの根源にあることを知る時、今の子どもたちは不幸だと思う。何故ならば、今の子どもたちでこのような「火」の記憶を幼児期に持ち得る子どもはほとんどいないからである。「火はものを煮るだけではない。それは人間における祝祭的なものを具体化する」とバンシュールは書いている。たしかにその通りで、そこに「火」の教育的な意味があるのだろう。ガスや電子レンジではこの体験は得られない。子どもたちが花火を喜んだり、夏期学校でキャンプファイアーに魅せられたりするの、この四元のひとつが持つ重い意味が恐らく背後にあるからだろうと思われる。

(上智大学)